

平成25年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	愛知県立刈谷北高等学校	氏名	浦部 紗矢
-----	-------------	----	-------

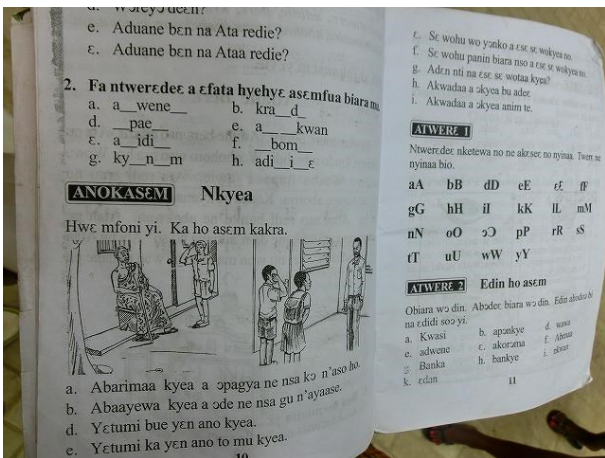
1. 印象に残る写真2点

●「ケープコーストの子どもたち」



「写真撮って!」と言いながら寄ってきた子どもたち。撮ったあと渡されたメモに、「勉強道具を買うためのお金をください」とあり、寄付者の署名ができるようになっていた。笑顔の裏で、少し胸の痛む思い出。

●「チュイ語(アカン語)の教科書」



教育言語がある国で、現地語(国語)の教科書を見たいと思っていた。写真は中学部2年生のものだが、文化に関する説明文が多く、お話は載っていない。そのためか、ガーナ人は人の立場に立って考えるのは苦手だそう。

2. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

この研修に参加したのは、主に本校の国際理解コースの生徒に対して国際理解教育を実施するためである。自らが見たこと、聞いたこと、感じたことを元に授業を行うことで、より具体的に真に迫った教育ができると考えて応募を決めた。実際に異文化に触れてみて、イメージとは全く違うガーナを堪能することができた。素朴で誠実なガーナ人との触れ合い、学校での実際の授業風景やその問題点、ガーナのために尽力する日本人と温かくそれを歓迎するガーナ人の関係、キリスト教徒とイスラム教徒が共生する町並みなど、カルチャーショックの連続だった。同時に「アフリカ」に対する画一的なイメージを持っていた自分にも気づくことができたことは大きな成果だった。

内向き思考が指摘される今の若者は、世界のこと、特に途上国のことを知らない。しかし、ガーナでの出来事を例に異文化との交流、その相違点や共通点を知ることの面白さに気づかせたい。日本と他国の繋りに気づくことも含めてもっと世界全体に目を向けさせ、グローバル 이슈が自分に関わるものであることや、自ら動くことで世界が変わることに気づくような授業を展開していきたいと考えている。

3. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

日本で育った私たちが持っている価値観が全てではないということを強く感じた。確かに日本はガーナに比べて時間に正確で教育水準が高く、物にあふれた便利な国だ。しかし、それはそれぞれの文化や国民が何を求め、何を大切にするのかの優先順位の差でしかないように感じる。

ガーナでは、道端のイスに座って話をしている人が多く、たくさんの子どもが外で遊んでいた。また、外国人である私たちを温かく迎えてくれる優しい人がほとんどだった。人と人との繋がりが非常に濃い国だと思う。

会計の行列ができて、ゆっくり丁寧に梱包して手書きの領収書を切ってくれるガーナ人。そんな素朴で誠実なガーナ人と接していると、日々時間に追われる生活から解放された気分になった。予定通りにいかないことは多かったが、イライラすることは不思議と少なかった。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

日本について知っていることをガーナ人に訪ねると、技術が発達している国だとか、具体的なメーカー名を答える人が多かった。また、日本が敗戦後どのように産業を発展させていったのか知りたいと言う人もいた。日本文化を知っている人は思ったより少なく、一般の人から出てきたのは工業大国としての日本だった。よく見ると、街には日本車や日本メーカーの電化製品があふれていた。違う文化においても日本で開発された製品が受け入れられるのは、生活を便利にするもの、人が求めるものはどの国でもある程度共通しているということだ。良いものを作れば、世界中にいるエンドユーザーがそれを通して日本を見るようになる。何もかもが違うように思える国で日本製品の看板を見ると、ガーナがぐっと身近に感じられた。

（3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

この観点において印象に残っているのは天水稲作についてである。日本は工業国のイメージが強いが、農業においても他国に伝える技術が多くあることに初めて気がついた。あぜの意味や稲を一行に植えることなど、当たり前と思っていた風景の中に様々な工夫があることを知り、伝統的な稲作の知恵に気づくことができた。

その一方で、現地の方が「子どもには農家を継がず、安定した就職先を見つけてほしい」と言っていたことはショックだった。せっかくノウハウを手に入れ効率が上がったのに、その技術が後代に伝わらない。日本でも農業の後継者不足や食料自給率の低迷が問題となっているが、ガーナも同じ道を辿ることを示唆しているようだった。一つ問題が解決できて、更に別の問題が出てくるのは、どこの世界でも、いつの時代でも同じなのかもしれない。だからこそ、同じような問題を克服した側による支援が不可欠で、互いに学びあう視点が大切なのだと改めて感じた。

4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

たくさんの日本人の方にお会いしたが、どなたも現地にとけ込んでいらっしゃるところがとても良いと感じた。ただ「教える側/教えられる側」という関係ではなく、お互いが何年も付き合った友人のように接しているのが非常に印象的で、ボランティア・専門家の方の人柄、また、日本の、持続可能な支援という事業のあり方が地域に温かく歓迎されていることが伝わってきた。本当に温かい雰囲気での活動で、素晴らしいと思った。

実際に活動地でボランティア・専門家の方にお会いしたが、2年という、支援するには短いかもしれない期間の中で、悩みや葛藤を抱えながらも懸命に前向きに取り組む青年海外協力隊がとても頼もしく、格好良かった。海外でのボランティアは、参加するにはかなりの決断が必要だ。一般の方向けにも JICA の支援先の訪問プログラムを実施するなどして、実際の活動を見てもらう機会を是非設けていただきたい。青年海外協力隊の負担は増えるかもしれないが、それによって後続く人が必ず増えるのではないだろうか。

5. 来年度参加する先生へのアドバイス(持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など)

全体的に日本とは違うことを常に意識していれば快適に過ごせると思うが、歯磨きにもミネラルウォーターを使う、ホテル以外では生野菜や果物を食べない、など気をつけていてもおなかが緩くなった。現地料理の味は日本人に抵抗のないものだと思うが、油が多い。ハマダラカは、アクラには思ったよりはいないそうだが、毎日虫除けジェルと長ズボン、携帯用の蚊よけは使っていた。また、Wi-Fi はどのホテルでも無料で使えた。

持って行った方が良いのはドルの小額紙幣と、5000円程度の乗継地の現地通貨。100ドル札しか持って行かなかったため、ホテルの精算に手間取った。フロントが現地通貨のお釣りを切らしていることも多いので、ぴったり準備した方が良い。また、乗継地での食事、交通費等に45ユーロ使った。空港だとドルは何とか使えるが、街に出ると使えない。

ガーナ人はカメラに対して敏感な人が多い。バスの車窓から外の風景を撮った時に、怒ってバスの近くに来た人もいた。外国人というだけでかなり目立つ国なので、撮影時には気を遣った方が良いと思う。

6. その他全般を通じての感想・意見など

気候も文化も人種も、何もかもが違う国、ガーナ。日本とは明らかに時間の流れ方が違う国で生活している人々とふれあい、たくさんのことを学んだ。決まりごとだらけの日本で生活しているが、「こうでなければいけない」ということは何もないということも教えてもらったようで、肩の荷が下りた気がする。食事を頼めば2時間待ち、講演者は30分遅れ、宿泊予定ホテルのうち半分が変更になる……あれほど思い通りに行かない国で、イライラしなかったのは自分でも驚きだった。参加した教員の方々も熱い志を持った方々ばかりで、とても良い刺激になった。生徒への授業に関するだけでなく、自分にとっても、この研修にこの仲間と参加できて本当に良かった。

日本での研修が充実しているのはとても良い。いろいろな手法や情報を教えて頂き、非常に役立っている。現地での研修も全体的に良かったが、地方の人ともう少し触れあう時間があると更に良かった。農村部の一般家庭の生活をゆっくり見てみたかった。

以上